

1. 「気と骨」歩み続けるひとびと 出雲の語部（郷土史研究家）・藤岡大拙氏 85歳 (P4~7)

国譲りの神話の地、古代史のロマンに満ちた出雲。藤岡さんが郷土史に目を向けたのは30歳のころ。教職の傍らその研究に没頭し第一人者となった。古代史の市民講座や古文書の勉強会は、50年近くも続き後進も育てた。歴史的なシンボルの保全で、彼がとりわけ尽力したのは**松江城**。天守閣が戦後、国宝から重要文化財に格下げされたことを、年200回以上の講演を重ね、成人市民ほぼ全員分の署名を集め文化庁に提出。その情熱が通じたのか、築城年の証拠の祈祷札が発見され、平成27年に**国宝に復帰した**。

2. 新世言 「しなやかな頑張り」 丸山敏秋 倫理研究所理事長 (P10~13)

外国で日本の音のまま使われる単語がある。フジヤマ、スキヤキ、スシ、ヤキトリ、サケ、カラオケなど。
※最近知ったのですが、**ミビョウ(未病)**も**世界共通語**になりそうだと、**黒岩神奈川知事**が言われていました。
とかく日本人は頑張れを口にする。これは稲作民族である日本人の勤勉精神をよく表しています。集団が結束した時のパワーはすさまじい。叶いたい望みが大きければ相応の努力が求められる。栄冠に輝く人々は正にそうでしょう。倫理運動の創始者丸山敏雄は「**遊働一致**」(働きのままが遊びとなり、遊びが真の働きとなる)を説いた。憩いも睡眠も働きである。頑張るときは精一杯頑張るが、心はリラックスした「しなやかな頑張り」が良い。

※上記の斜め字は、岩見の追加文章です

3. 特集「読書の秋に」 良き書物を読むことは過去の最もすぐれた人々と会話するようなもの (P14~29)

①書籍の至言が人生の礎いしづえに(活字には人を励まし勇気づける力があります)

- ・「当下一念」(中江藤樹)今を精一杯生きればよいという意味です。
 - ・母の言葉「口癖が人生を変える。自分が発した言葉の通りに人生は変わる、自分の言葉に責任を持ちなさい」
 - ・インターネットの情報には、その部分の答えしかありませんが、本にはテーマ全体の指針が示されています。
- ②多くの先人の知恵に触れる喜びは何物にも代え難く、偉人の生涯を通して、隠された真理や道理が見えてくる。
- ③子供が本好きになるには？好きな本を選ばせ、決して読書を強制せず、親が率先して読書を楽しむことです。

4. 明日へのエール「暮らしやすい社会を作るために、私たちができること」 (P30~33)

国民の6%が何らかの障害を有していると発表された。高齢化に伴い、様々な介助を必要とする方も多い現代社会。ほんの少しの勇気が幸せの波紋を広げます。困っている人がいたら「何かお手伝いをしましょうか？」と、街中で声かけとお手伝いを続けていると、お互いが温かい気持ちになって喜び合えることを知りました。

5. 実践の軌跡「愛する母に、ハイで応える」加藤美知子さん 69歳 (P38~45)

保育園経営で、母からのお説教や指導に葛藤する毎日でした。母は小学校を定年退職後、日ごろ感じていた家庭教育の重要性と今後の共働き世帯の増加を見据え、昭和49年保育園を開きました。一人娘である私への接し方は特に厳しく、地域からは信頼される母を一面では尊敬するものの、母の言葉に傷つき反発もしていました。H2年に私が園長に就任、保育士さんから純粋倫理の勉強会に誘われ参加したことで、母との葛藤を相談することができました。「**茶碗より大きな蓋のように、あなたが大きな器となり、お母さんを受け止めましょう**」
H10年に母が入院し病室で昔話を始めました。それは私には想像もつかぬ苦難の積み重ねの物語でした。私は母を誤解し、敬遠してきたことを申し訳なく思い涙が止まりませんでした。**お母さんに「私は幸せ」って言ってもらえるように、母の全てを包み込むように暮らすと決心しました**。最後の9カ月間は、私の一生の宝です。

6. 実践の軌跡「妻に笑顔が戻って新たなスタート」 山脇健司さん 60歳 (P46~52)

京都の大手呉服屋の婿養子となり義父の会社を継ぎましたがバブルで倒産。5年間勤めた後、47歳で再起業。その後、倫理法人会で純粋倫理を学び、自己流で生きてきたことを深く反省し実践。順調な今があります。